

佐土原キリスト教会 2021年12月5日 礼拝説教

聖書箇所：ルカの福音書1章39～56節

説教題：神は忘れない

コロナ禍で一緒に集って礼拝を捧げることが長くできませんでした。それまで当然のように集まり、交わりを持っていたのに、それができなくなったことは、個々人にとっても、教会にとっても、試練だったと思います。ただ、私は、感謝なことに、個人的にお会いしたり、お電話をしたりして、お交わりする機会が与えられました。その時、感じたことは「交わりは癒しだな」ということです。癒されるのを感じたのです。今、こうやって、また一緒に礼拝ができるというこの恵みを改めて感謝するものですが、それだけに「この交わりを大切にしたい」と願うのです。意識しようが、しまいが、私達は、交わりによって支えられ、癒され、励ましをもらっているのではないのでしょうか。今日の箇所を読んで、主にある交わりの恵みを、聖書からも教えられる気がすることです。

さて「クリスマス物語」は、「受胎告知」{天使がマリヤに現れて、『あなたは聖霊によって男の子を産みます』と告げること}から始まります。マリヤは「私は主のはしためです…おことばどおりこの身になりますように—(『神様、全てをお任せします』)」(ルカ1:38)と言います。14～15歳の少女が自分の身を神に献げたのです。その「クリスマス物語」は、私達に何を語るのか、そのメッセージの1つを語ってくれるのが、読んで頂いた「マリヤの賛歌」です。3つのことを申し上げます。

1：「マリヤの賛歌」の前提～交わりの慰め

「マリヤの賛歌」には、前提があります。マリヤは、天使から受胎を告げられ、譬えようもないほどの不安の中にいたと思います。そのマリヤが、自分を受け止めてくれるだろう相手として思い浮かべたのが親類のエリザベツでした。マリヤは、天使から「エリザベツも神の特別の働きを受けて子供を身ごもった」ことを聞かされていました。自分も神の特別の働きを受けて身ごもる。マリヤは、神の業を受けた者として、同じような経験をしたエリザベツと会い、分かち合いたかったのです。エリザベツもまたそうだったでしょう。エリザベツは、事の真相を悟り、マリヤを歓迎します。良き相談相手となり、3ヶ月間、マリヤに憩いの場を提供しました。そのようにエリザベツに受け入れられ、慰めを受け、共に喜びと驚きを分かち合った、そのマリヤの口から語られたのが「マリヤの賛歌」なのです。マリヤが1人居る時、その口からこの「賛歌」は出て来なかったのです。

「マリヤの賛歌」を考える時に、教えられることがあります。古代からキリスト者は、このマリヤとエリザベツの交わりの姿に「教会の姿」を見て来たのです。私達は、なぜ日曜毎にここに集まって礼拝をするのでしょうか。教会をご存知ない方は「キリスト教では、そんなにしょっちゅう教会に行かなければならないのか」と言われると思うのです。でも私達は、交わりの中でこそ神を心から喜べるのです。主の名によって集まる時に、主もそこにおられるのです。だから、心からの讃美を歌うことが出来るのです。讃美の中で神を感じるのです。私達にとって、集まること、交わることは、喜びなのです。その意味で、この会堂は、マリヤとエリザベツが交わって、喜び、その口から讃美が流れ出た「山里」そのものなのです。

そのようにエリザベツとの交わりの中からこの「マリヤの賛歌」は生まれるのです。この「賛歌」には、マリヤの精一杯の信仰が語られます。クリスマスは、イエス様の誕生を祝うと共に、イエス様の再臨を待望する時でもあります。その意味で、この「賛歌」は、クリスマスを祝い、イエスの再臨を待望する私達に大切なことを教えてくれるのです。

2：「マリヤの賛歌」の内容～神は忘れておられない

「マリヤの賛歌」は、(47節)「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びた

たえます」(47)と始まります。マリヤは心から神を讃美しています。なぜ神を讃美しているかという、「『卑しいはしため』と自称しているマリヤに、神が目を留めて下さり」、「(神が)大きなことをして下さったから(だ)」と彼女は歌います。実際マリヤは、当時の社会にあつて身分の低い、いわば「取るに足りない人」だったでしょう。その彼女に、神が目を留めて下さったということを、彼女は喜んでいのです。しかし神がなされた「大きなこと」とは、彼女が聖霊によって身ごもる、ということです。それは命の危険さえ覚悟しなければならないことでした。なぜ、彼女はそれを「喜び称える」と言ったのでしょうか。

それは、彼女は、ここで個人として喜んでいのではないのです。彼女はイスラエル人、神の民でした。やがて神が人の世に直接介入して下さり、神の民を助け、神の民を苦難から救い出して下さる、そのような「来たるべき世—(新しい世)」が来ることを教えられていました。その「新しい世」は「神が救い主を送って下さることによって始まる」ということも教えられていたでしょう。マリヤは、天使から、自分がその救い主を産むことになることを告げられました。それはつまり、待ち望んでいた「新しい世」の到来を意味します。

彼女達は、酷い世の中に暮らしていたのです。権力者によって弱い者が踏みにじられる、そういう世の中にあつて、救い主の登場、その登場によって始まる「新しい世」こそ、イスラエル人の唯一の希望だったのです。その「新しい世」は、51～53節にあるように、神が権力ある者を低め、低い地位に有る者を高め、飢えた者を満たし、富んだ者を手ぶらで帰らせる。つまり、抑圧の下にある者がその立場を引き上げられる、権力を誇る者が追い散らされる、そのように神の憐みが成る、神の義が成る、そのような世界なのです。それは「逆転の世」でした。53節、54節が過去形で歌われているのは、「神が必ずそうして下さる」という確信を表す表現です。だから、その「新しい世の到来」を、救い主の誕生を、神の民として喜び、そのために自分が用いられることを、信仰を持って喜んだのです。

しかし、さらに彼女に絞って考えれば、あるいは個人のレベルに引き下げて考えれば、それは(52節)に「低い者を高く引き上げ」(52)とありますが、その意味は「問題に悩み、苦しみ、神に助けを呼び求めている人を、神が必ず救い出して下さる」という信仰を告白した言葉だし、50～53節の全体を通して彼女が言っているのは、その「世」では、「苦しむ者が神によって助け出される、泥の中から引き上げられる」、いわば「運命の逆転が起こる」ということなのです。「神の御手の中で物事が変えられ、逆転させられ、そのようにして神を信じる者が救われて行く」ということなのです。なぜそうなのか。それは、54～55節で彼女が「主は…あわれみを…忘れないで、そのしもべ…をお助けになる…それはもう始まっているからだ」と言っている通り、神はご自分の憐みをお忘れにならないからです。

この「賛歌」のポイントは、「『新しい世』が来ることも、『運命の逆転』が起こるのも、神が神の民を忘れておられないからだ」ということです。「神は、神の民に目を留めておられる。その苦しみにも、辛さにも、悲しみにも、惨めさにも、目を留めておられる。決して忘れてはおられない。だからこそ神は、神の時に、その御力を現し、私達に神の憐みを、『逆転』を見せて下さる」、それがこの「賛歌」が語りかけていることです。

もちろん「救い主の誕生」によって始まった「新しい世」の「逆転」は、「主の再臨の時」に決定的に起こることです。だから私達は、主の再臨を待ち望みます。しかしそれは、「救い主の誕生」という大事件のために、神が「マリヤのような『卑しい者(小さい者)』を選ばれた」ということにおいて、すでに始まっているのです。だから、その「新しい時代」の中で、彼女は実際に「逆転」を経験して行くのです。

彼女は、聖霊によって身ごもりました。夫となるヨセフにだけはそのことを信じて欲しかった。しかし人間的に考えれば望みのないことです。しかし神は、夢の中でヨセフに語りかけ、ヨセフがそのことを信じるができるようにして下さるのです。「逆転」です。また、当時イエスの父親がヨセフ

ではないということ、知る人は知っていたらしいのです。マリヤは、少なからぬ人々から疑惑と非難の目で見られ、危険の中にいたのです。しかしそれにも拘わらず、彼女は守られ通して行くのです。

「逆転」です。そして、マリヤの経験した最大の「逆転」は、我が子イエスの運命の逆転でしょう。イエス様は、33歳の若さで、「最も残酷な刑」と言われた十字架に掛けられ、人々に罵倒され、唾をかけられ、血を流して、苦しみながら死んで行ったのです。彼女にとって、どれほどの痛み、悲しみ、苦しみだったのでしょうか。彼女は「神に捨てられた」と思ったかも知れない。しかしその死んだイエスが復活するのです。全てが終わったと思ったことが、終わりではなかった、始まりだったのです。それだけではない。罵倒され唾をかけられながら死んで行ったイエスを、やがて人々は、神として崇め始め、「十字架で死んだイエスは神である」ということを信じる人々が集められ、教会が生まれるのです。彼女は「逆転」を生きるのです。

そして50節に「そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます」(50)とある通り、彼女は、「私に起こったことが、『運命の逆転』が、どの時代の人々にも起こる」という確信を込めて歌いました。魂がそのように導かれたのです。私達の毎日の生活は、「私は神に忘れられてしまったのではないか」と思う、そういう思いの連続のような気がすることがあります。どうして私はこんな状況の中に置かれるのか、どうしてこんな悩みの中に置かれるのか、私のような小さな存在は、神から忘れられているのではないか、そう思う時があるかも知れません。しかし「マリヤの賛歌」は語るのです。「神は、決してあなたを忘れてはおられない、神は、その民を救うことに真実であられる。神は『あわれみの神』であられる。必ず『神の時』が来る。神を信じるなら、神によって神の御力を見せられる時が来る」。

佐藤彰先生の教会に通っておられた方のご主人は、お酒ばかり飲んで、家族の生活は苦しい、でもそんな中でも、奥さんが神様を信じて辛抱強く生きていました。しかし、ご主人は、奥さんに文句ばかり言っていました。ある時は、奥さんがご主人に買って来たシャツをビリビリに破いて投げつけたりしたのです。でも奥さんは、神様が支えておられました。ところが、そんなある日、奥さんが「そろそろ洗礼を受けたいんだけど、良いかい」と言ったら、何とご主人が「俺も一緒に洗礼を受ける、お前の信じている神様を俺も信じる」と言ってクリスチャンになったそうです。神様は凄いことをされます。ご主人が亡くなった時、そのお顔は笑っていたそうです。

いずれにしても「マリヤの賛歌」は、「神はあなたを忘れてはおられない」、「必ず神の時が来る」と語るのです。

2: 「マリヤの賛歌」のチャレンジ～神を大きくする

「マリヤの賛歌」は、「神の約束」を待望する私達の信仰の在り方に対してチャレンジも語ります。それは「神を大きくする」ということです。

「マリヤの賛歌」は「マグニフィカート」と呼ばれます。「マグニフィカート」とは、ラテン語で「大きくする」という意味です。マリヤはここで、神を大きくしているのです。もちろん神様は、人間が大きくしたり、小さくしたり出来る方ではありません。しかし神の大きさは、私の態度によって変化するのです。ある人が言いました。「分数で考えるとこのことが分かる」。分母は自分。分子は神様。分子である神様は「1」、これは変わらない。その時、分母である自分が「10」であれば、結果として神様は「1/10」になります。分母が「1」になれば、神様は「1」になります。分母である自分が小さくなればなるほど、神様は大きくなるのです。

それは具体的にはどういうことでしょうか。三浦綾子さんの「泥流地帯」が、今年、映画化されることになったというニュースを読みました。私は、本を読んだことはまだありませんが、記念文学館の森下先生の講演を何度も何度も聞いています。大正15年、十勝岳が爆発して、大泥流が発生して、開拓農家に育った主人公の2人の少年(青年)の家も、家族も、何もかも、泥流に飲まれてしまうので

す。お兄ちゃんの方は、農民として逞しく成長して、被災した地を復興しようと頑張るのです。ところが、泥流以降も色々な苦難があるのです。苦しいことが起こるのです。弟が聞くのです。「何でこんなことになるのか。真面目に生きていても、こんな苦難があるのなら、生きていくことはバカくさいじゃないか」。弟が、また叔父さんが、「何でこんなことが…」、失意の中でそう問う時に、ただ1人クリスチャンであるお母さんが言うのです。「人間の思い通りにならないところに、何か神の深いお考えがあると聞いていますよ。ですから苦難に遭った時に、それを災難だと思って嘆くか、試練と思って奮い立つか、その受け止め方だ大事なのではないでしょうか。「人間の思い通りにならないところに、何か神の深いお考えがある」、この信仰を受け止める、それも神を大きくすることではないでしょうか。私達にも、信仰を持って神を見上げていても、「神様、どうしてですか」と言いたいことがあります。その時「神には深いお考えがある、これにも必ず意味がある、やがて分かる時が来る」と信じることができれば、それは希望ではないでしょうか。森下先生の講演には、この言葉で奮い立った1人の方の話も出て来るのです。子供の頃の病気で、ずっと辛い思いをした人です。「何で僕だけが…」、そう思いながら生きたのです。しかし、30歳を過ぎた頃に三浦綾子の「泥流地帯」を読んで、この言葉に出会ったのです。「人間の思い通りにならないところに、何か神の深いお考えがあると聞いていますよ…」。その方に「神の深いお考え」という希望が生まれ、立ち上がったそうです。やがて信仰を持って、祈りに生きるようになられ、祝福を経験して行くのです。その方はこう言うそうです。「苦難が来ると、人は苦難の理由を過去に探そうとする。しかし神は苦難の理由を未来に持っておられる」、「神には計画がある—(必ず意味がある、深いお考えがある)」ということです。

私は神を大きくして生きているか、神よりも自分を大きくして、不平不満を口にしながら生きているか、問われます。神を大きくする時、私達には、聖書が「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません」(2コリント4:8)と言うように、神を見上げるといふ道が、いつも備えられているのです。「そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます」(1:50)。神を見上げることによって、私達は神の憐れみに与って行くのではないのでしょうか。神を大きくする信仰でありたいと願います。

3:最後に

「マリヤは三か月ほどエリサベツと暮らして、家に帰った」(56)。マリヤは、「賛歌」を歌った後、普段の生活の場に戻りました。私達もこの場を出たら普段の生活の場に戻ります。そこでまた1週、神の恵み、神から来る希望に支えられて、信仰に生きて行きたいと思えます。